



危機状況下にある 思春期の女の子たち

ロヒンギャの人々からの声

サマリー・レポート



ミャンマーにおけるロヒンギャ族への迫害から今も続く危機は、2017年8月、ラカイン州における暴力行為の勃発のあと、さらにエスカレートした。100万人近いロヒンギャ族がミャンマーを脱出することを余儀なくされ、現在は隣国バングラデシュのコックスバザールにある難民キャンプに暮らしている（注1）。本報告書は、思春期の女の子たちの粉々に破壊されてしまった暮らしや経験に焦点を当てた、初めての報告書となる。

プラン・インターナショナルが委託した本報告書は、2018年4月にバングラデシュで実施された調査データを基にしている。2つの年齢層（10～14歳と15～19歳）の思春期の女の子が、起きている危機の影響をどのように受け止め、そして直面する困難にどう立ちむかっているかを精査するものである。

現在も続くロヒンギャ危機、そして言うまでもなく世界各地の危機によって非常に深刻な影響を受けている思春期の女の子の数が非常に多いにもかかわらず、彼女たちのコミュニティや人道支援者たちが彼女たちに注意を払うことはほとんどない。今回の調査は、それを正そうという試みである。女の子と若い女性には権利があるということ、そして彼女たちの考えには耳を傾けて行動に生かすだけの価値があるということを認識するものなのである。



女の子たちが教えてくれたことは？

女の子たちは孤立している

キャンプでは、家族は見知らぬ人たちのなかで暮らしているため、親は娘の安全が心配だと語る。また、性別による役割分担に対する古くからの考えがあるため、娘、とりわけ年長の娘は家の中にいるべきという決断がなされることもはっきりとわかっている。

「私は外に出かけることができません。この暑さのなか、いつも家の中にいなければならないのです」
18歳の女の子

この不自由さには、甚大な影響がある。女の子は勉強することができず、医療サービスも利用できず、新しい友だちも作れず、暮らしを再建する手助けになるかもしれない技能を身につけることもできない。情報が得られないことと仲間同士の支援の欠如は、うつ病やその他の病気、早すぎる結婚のリスクをますます高める。

「両親は、私を無理やり結婚させます。私にできることはありません。ビルマ※ではそんなことはできなかったけど、ここではできるんです」
18歳の女の子
※ミャンマーの軍事政権に反対する国民は今もビルマという国名をあえて使い続けている。

聞き取りをした女の子の75%以上が、自分の人生についての意思決定をすることができないと回答している

彼女たちの生活環境は、堪えがたいほどである

大多数の女の子が、自分たちの経験を「息苦しい」と語る。キャンプは人口過密で、シェルターはうだるように暑い。家から出ることを制限された女の子にとってはとりわけつらい環境である。また、女の子は清潔な水の入手に加え、さまざまな家事に苦勞している。

1. Inter Sector Coordination Group (ISCG). 10 May 2018. "Situation Report: Rohingya Refugee Crisis." p. 2.

「私たちは、水を丘のずっと下から運んでこなければなりません。水不足は深刻で、シャワー室もないので体を洗うことが出来ません」 14歳の女の子

彼女たちは、学校に行きたがっている

すべての年代の女の子が勉強に対する情熱と、学校に行けない現状に対する不満をもっている。彼女たちの多くにとってはどのような教育も、現在の暮らしと未来のチャンスの両方を改善する手段なのである。

「私は教育を受けたいけどできません。これが私の暮らしで一番の問題です。私は、勉強することで、自分で身を立てたいんです」 14歳の女の子

調査対象の女の子のうち、なんらかの学校に通っていると答えたのはわずか 28%

健康でいることは難しい

質のよい食料がないことは妊婦や親のいない女の子にとってはとりわけ深刻な問題である。すべての女の子が、精神的なケアを含む保健サービスをもっと利用できるようにする必要がある。彼女たちはとくに性と生殖に関する健康についての情報をもっとほしいと思っている。

「性と生殖に関する健康について誰も教えてくれませんでした。人がこの話題についてひそひそ話をしたときに学んだんです」 18歳の女の子

苦難は多々あるが、本調査では希望とめざましいレジリエンス（回復力）も目撃した。思春期の女の子は、自分たちの幸福の鍵となる要素をいくつかあげてくれた。

家族と友人

思春期の女の子は、支援と癒しだけでなく、暴力から守ってくれる家族と友人の重要性を強調した。家族がばらばらになった女の子、親やきょうだいを殺された女の子は、新しい住みかでもより傷つきやすい感情を持っている。話を聞いてくれる人がいて、安全な居場所があり、何かやることがある女の子は、支えられていると感じていた。

前向きな展望と信念

驚くほど多くの女の子が前向きで、未来に対する希望を口にした。多くが信念、あるいは運命に対する信条を持っていて、それも彼女たちの助けとなっていた。

教育と新しい技能の習得

女の子たちは、学校や職業訓練講座に通うことで、今楽しいだけでなく、将来の展望を改善し、ゆくゆくは家族の未来も明るくできることを明らかに認識していた。

治安の改善

暴力や暴力に対する恐怖が暮らしの一部となっ
てはいるものの、思春期の女の子はミャンマーにいたときよりもバングラデシュにいるときのほうが安全に感じられると語った。そのおもな理由は、軍や警察がないことだと言う。

「キャンプでは安全に感じられます。ビルマでは、軍が市民を切りきざんで川に投げこんだりしてましたから」 12歳の女の子

結論

行動の制限、長く続いてきたジェンダー差別、そして現在の難民キャンプの状況が、バングラデシュの難民キャンプに暮らす思春期の女の子たちが直面するおもな困難である。彼女たちはミャンマーにいたときよりも安全に感じているが、同時に、制約も感じている。教育の機会は少なく、コミュニティを支援するために自分の能力を伸ばす機会もない。女の子たちはよりよい未来を信じており、それを実現できるだけのエネルギーも持っていることが多い。彼女たちの努力は家族やコミュニティ、そして彼女たちの人生を左右する多種多様な役人や機関によって支援されるべきである。

ロヒンギャの人々からの声： 女の子たちの提案

- プログラム策定者やキャンプ管理者は、女の子の声に耳を傾けなければならない。彼女たちに影響を与える問題には彼女たち自身がかわれるようにするべきで、彼女たちを家に閉じこめておいてはいけない。これは、安全な空間を作り、思春期の女の子が参加できるフォーラムやプロセスを提供するということである。この地方の家族やコミュニティに根深く残り女の子の権利を奪うジェンダー差別を認識し、取り組むことが重要である。
- 女の子が滞りなく教育を受けられるようにする。教育制度は柔軟であるべきで、女の子のニーズや状況に対応できなければならない。そして、生活技能や職業訓練も含めるべきである。
- 女の子にやさしい情報やサービスへの資金提供が優先されるべきである。とりわけ心のケア問題、そして性と生殖に関する健康と権利が優先されなければならない。

